

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 山田有希子

山田有希子氏の博士号申請論文『「逆さまの世界」としてのヘーゲル哲学—矛盾と反復の論理学—』は、ヘーゲル哲学が「逆さまの世界」を論じきる哲学であるということ、つまり、通常正しいあるいは真理であると思われる事柄が内在的に転倒し、しかもこの転倒した事態こそが実は真理であると徹底して論じる哲学なのだということを、丹念な論述を通して提示した労作である。その注目すべき論点は、ヘーゲルの哲学的方法論の核心である弁証法を、「否定」の「第一義的反復」と「第二義的反復」とに区分し、前者、つまり体系構築の基盤となるその都度の一回的反復の重要性を強調し、ハイデガーの言う「絶対者の臨在（パルーシア）」を、哲学体系の全体においてではなく、体系構築のプロセスにおいてその都度見て取るということである。

本論文は、二部構成で、全五章からなるが、第一章「「逆さまの世界」としてのヘーゲル哲学」において、ヘーゲルの第一の主著『精神現象学』における「経験」の概念をめぐり、「理性」の役割が重視され、かの「第一義的反復」の核心的意味が明示されつつ、絶対者の臨在論が展開される。第二章「悟性と「逆さまの世界」」においては、弁証法における世界の転倒が明確に主題化される同主著の悟性章を取り上げ、「力」の概念の導入とともに科学的な法則が確立されるプロセスと、その法則の内在的な崩壊の論理が、テキストに即して丁寧論じられ、かの注目すべき論点が具体化される(以上第一部)。

次に、第三章「ヘーゲルの論理学とカントの論理学」は、ヘーゲルの第二の主著である『大論理学』を取り上げ、まずは、カント『純粋理性批判』におけるアンチノミー論を、「矛盾」と「対立」および排中律という観点から詳細に論じつつ、「矛盾」の論理としてのヘーゲル弁証法の特質を浮き彫りにする。さらに第四章「ヘーゲルの「矛盾」の概念」においては、ヘーゲル論理学における矛盾概念の全面展開を的確に解釈することによって、ヘーゲル弁証法の核心的論理を明示する。矛盾はもとより解消されるが、重要なのは、同時にそれがつねに保持されており、そこに「絶対者の臨在」の論理が成立することであると説かれる。最後に第五章において、様相論が主題化され、同時に偶然性でもある「絶対的必然性」の論理構造が提示され、転倒の論理が総括されるとともに、絶対的な自己根拠としての「自由な現実性」つまり「絶対者」の究極の実相が明らかにされる(以上第二部)。

本論文はこうして、正統的観点を取りつつも、ヘーゲル哲学像そのものを新たに構築し直すという大胆で斬新なヘーゲル論である。展開される論議には、「弁証法」(「逆さま」の論理)と「思弁的理性」の関連などをめぐってなお説得力に欠けるものも散見されるが、本論文はまちががなくヘーゲル研究に一石を投じよう。

よって、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を十分に授与しうるものと判定する。